

仕事人秘録

静岡銀行での3つめの
職場は国際部だった。

約6年の瀬名支店（静岡市）での生活を終えて国際部勤務の辞令を受け取り、東京支店での新生活が始まります。1990年末か91年の年明けのころで、湾岸戦争の真っ最中でした。国際部への異動の希望など出していない。英語は学生時代に英検2級を取ったぐらいのレベルでした。

後で聞いたことですが、当時の地方銀行は海外展開を進めていて人材の育成が急務だったのです。決して優秀ではない人材が海外赴任できるかを試そうとしたらしく、私はそのトップバッターだったそうです。とはいえ国際業務なんて知りませんから為替の基本

行列のできる経営相談所 ⑦

富士市産業支援センター長
小出 宗昭氏



現在の静岡銀行東京営業部が入るビル（千代田区丸の内）

国際部 3カ月で「出して」

いました。「小出君。『石の上にも三年』と言っよね。君はまだ3カ月しかたっていないじゃないか。もうちょっと頑張ってみてもいいと思うよ」。とりあえず辛抱することになりましたが、なかなか歯車がかみ合わない日々です。

合法的に国際部から抜け出せるチャンスが転がってきた。

当時、千葉県習志野市に

論文を書こうと思ったのは簡単です。短時間で書けると思ったからです。一晩かけて

から勉強する必要がありません。不遜な言い方ですが、大切な仕事なのは確かかもしれませんが、「私ですが、私には輸出入の決りやなくていい仕事ではないか」と思い、赴任して3カ月後に人事に電話で直りました。おまけに満員電車に揺られての「痛勤」で取引先には養鰻（まん）さん。代えて下さい」と。早くここから抜け出したいと思っていました時、ある社内通達が目に留まりました。論文の募集で、こんな内容だったと記憶しています。

住んでいて日本橋の支店へはJR津田沼駅から通勤していたのですが、発車のベルを聞くと本当に憂鬱になりました。おまけに満員電車に揺られての「痛勤」で1週間くらいして研修課長が私のところにやってきてこう言いました。「小出君、君の論文を見たよ」。その後に続く言葉にとて驚いたのを今でも鮮明に覚えています。